

JAILA 第 1 1 回全国大会企画

シンポジウム 1 :

続・英語読解力再考——教育現場は「英語が読める」ことをどう捉えているのか？

登壇予定者：

講師：福重 茜（神奈川県上鶴間高等学校教諭）、柗木 貴之（北海学園大学准教授）、
吉田 安曇（岡山大学非常勤講師）

ディスカッサント：横山 千晶（慶應義塾大学教授）

司会：北 和丈（東京理科大学准教授）

概要・要旨：

日本の文脈において英語教育・学習を論ずるに当たり、英語読解力、すなわち英語が読める能力を涵養することの意義が軽んじられることはまずあり得ないとしても、その「英語が読める」という言葉の定義を突き詰めて考えると、そこには全く議論が噛み合わない可能性すら孕んだ危うさが潜んでいることがわかる。現代の日本に生きる我々にとって、果たして「英語が読める」とは、誰が、何を、どのように読めることを意味していると考えべきなのだろうか。本企画は、この難題への取り組みに先鞭をつけた日本英文学会第 94 回全国大会第 12 部門シンポジウムの続編として、様々な教育現場の視点から「英語読解力」像のいまを複眼的に捉え、日本の英語教育が進むべき道筋を見出そうとする試みである。

シンポジウム 2 :

教養としてのスポーツ：その価値と教授法

登壇予定者：

基調講演者：中西 純司（立命館大学 産業社会学部 教授）

：朴 ジョンヨン（神田外語大学 体育・スポーツセンター 准教授）

企画及び事務担当者：大西 好宣（千葉大学 国際未来教育基幹 教授）

概要・趣旨

教養を意味するリベラルアーツは、古代ギリシャで生まれた概念である。古くは自由 7 科とも称され、具体的には文法学・修辞学・論理学・算術・幾何学・天文学・音楽を指す。しかしながら、何をもって教養と見做すかは時代や地域に応じた差異や変化が本来あるはずで、さしずめ現代ならば世間の関心が高いスポーツは新たな教養の一つかもしれない。しかし現実には、わが国の大学で実技以外にスポーツが授業として取り上げられ、現代の教養として語られる場面は残念ながらさほど多くない。そこで本シンポジウムでは、まず、1) スポーツの持つ現代的な価値や教養としての側面について、専門的な見地から改めて捉え直すと共に、2) 現時点で展開されている複数の大学の具体的な試みを紹介しつつ、3) 必ずしもスポーツを専門としない大多数の大学教員が、自らの専門分野を生かしながらどのように教養としてのスポーツ教育に関われるのか、その方法論を検討する。